

鉄村 信治 奈良東病院 リハビリテーション科

このたび近畿地方会の新幹事に仲間入りさせていただきました奈良東病院の鉄村と言います。私は平成7年に大阪医科大学を卒業後、整形外科学教室へ入局しました。以後、各関連病院を回った後、約4年前より現在の職場で勤務しております。また、同時期より大阪医科大学のリハビリテーション科の方で研修をさせて頂いており、佐浦教授、田中先生の御厚意により、昨年度からは非常勤講師として学生教育の方も担当させて頂いております。現在は主に回復期リハ病棟で運動器疾患中心に診療を行っておりますが、当院は認知症を含めた重症患者が多く、日々悪戦苦闘しております。まだまだ若輩者でありリハ医としても経験不足ですが、このような機会をいただき、諸先生方からご指導いただけるチャンスであると大変よろこんでおります。また、近畿地方会の方では教育委員の担当となり、研修会の運営等につき仕事させて頂く事になりました。何か自分なりのアイデア等少しでも出せればと考えております。今後少しでもお役に立てる様がんばりたいと思いますので、ご指導よろしくお願い致します。

川上 寿一 滋賀県立成人病センター リハビリテーションセンター医療部リハビリテーション科

このたび、日本リハビリテーション医学会近畿地方会幹事を務めさせて頂くことになりました。私は現在、滋賀県立成人病センターのリハビリテーション科に所属しております。当科は滋賀県立リハビリテーションセンターの医療機能を担うことから、病院の中央診療機能と県域のリハビリテーションセンター機能の双方を充実することを目標としています。現在、急性期の医療のリハビリテーションから、地域における関係機関などの協働活動などをふくめた社会参加を目標としたリハビリテーションや地域における啓発活動などに従事しています。

リハビリテーションを通して携わるべき事柄は、機能再建などの側面から、物理的、社会的、心理的その他多面にわたります。近年、回復期リハビリテーション病棟が増加しましたが、くらしに立脚したリハビリテーションの必要性はさらに充実することが求められています。そこでは、医科学、工学、社会学などに横断的包括的にかかわるリハビリテーション医学の役割は重要と思われれます。

健康と社会的な生活の構築に対する努力をご指導いただきながら継続して行いたいと考えております。どうかよろしく願いいたします。

小口 健 白浜はまゆう病院 リハビリテーションセンター

この度は幹事に選出して頂き有難うございます。大阪大学医学部附属病院リハビリテーション部で阿部和夫先生にご指導を頂いた後、2005年より白浜医療福祉財団 白浜はまゆう病院リハビリテーションセンターで、リハビリ医として診療業務に従事しております。当院では急性期・回復期・療養の各病棟、外来・訪問と幅広くリハビリを行っており、脳血管障害や整形疾患周術期、神経筋疾患等が主ですが、他にも地域の患者様のニーズにはできるだけ応えられるよう心がけております。高齢化が進む当地におきましてはリハビリの需要は多く、リハビリの果たす役割も大変大きいのですが、その供給や連携に関しましてはまだ十分とは言えません。地域リハビリ広域支援センターとしての活動を通じて等で少しずつでも体制を充実させていきたいと考えております。今回、広報委員に任命頂きました。リハビリの重要性の認識を高めていけるよう、広報委員としてのお仕事を通じ近畿地方会の発展に少しでもお役に立てればと存じております。どうぞ宜しくお願い致します。

**新専門医
に聞く**

平成23年度に新しくリハ専門医になられた先生に抱負を語っていただきました。専門領域がそれぞれ異なりますが、リハ医学にかける情熱は大きく、これからの近畿地方会を引っ張る新進気鋭の方々です。近畿地方会へのご支援を期待しております。

河崎 敬 和歌山県立医科大学 リハビリテーション科

和歌山県立医大リハビリテーション科の河崎敬と申します。この度平成23年度専門医を取得させていただきました。和歌山県立医大は近畿の国公立大学で唯一のリハビリテーション医学教室があり、田島教授をはじめ諸先輩方から御指導を受け、日々臨床・研究に邁進しています。現在日本の医療において過疎地・僻地の医師不足が問題であり、和歌山県でも本州最南端に位置する串本町、白浜、那智勝浦などの温泉地等、僻地への医療の提供が県立医科大学の医師に求められています。今後全国的にリハビリ医療への需要が増加する中、僻地への良質なリハビリ医療の提供も急務であり、その一助として新専門医として当教室の理念である患者様中心の医療、患者様を全人的に診るwhole bodyの精神を今後も継承していきたいと考えております。

菊地 克久 滋賀医科大学リハビリテーション科

整形外科で主にリウマチ関節外科を中心に活動し、平成20年からは回復期リハビリ病棟での仕事も兼ねておりました。又、今秋からは滋賀県の東近江医療圏へ地域医療再生の為に、大学の寄附講座の形で出向する事になりました。一部を除き、急性期から維持期までの地域ネットワークがまだ不十分で、自立に向けた専門家の関わりも少ない状況のようです。今回専門医に加えて頂き、整形の運動器リハビリのみならず、他分野のリハビリでも、①リハビリの普遍化、②チーム医療の実現、③機能分化・連携、④システム・ネットワーク化(組織化)、をそれぞれ積極的に推進できるような力になりたい、と考えています。

金澤 慎一郎 兵庫県立リハビリテーション西播磨病院

今回専門医に迎えていただきました。私は平成元年に香川医科大学を卒業、神戸大学整形外科に入局しました。肢体不自由児施設に8年間勤務したのがリハビリに向きあうきっかけでした。経験したことのない脳性麻痺の方に接することが多くなり、整形外科の知識だけでは対応が困難なことが多々ありました。5年前にリハビリテーション西播磨病院設立と同時にリハビリテーション中央病院から異動し現在に至っています。障害者病棟では脊髄損傷、外来では近隣の脳性麻痺の方(特別支援学校と小児デイサービス施設が近くにありまます)に関わるが多くなりました。微力ながら多職種連携によるリハビリに努めて行きたいと思っております。

今井 晋二 滋賀医科大学

この度、専門医に登録頂いた滋賀医科大学の今井でございます。私は平成元年に同大学を卒業後、同年同大学整形外科に入局しました。平成2年に同大学大学院に入学し、平成6年に終了し博士号を取得しました。平成6年から草津総合病院整形外科で勤務した後、平成8年からヘルシンキ大学医学部整形外科にて留学いたしました。平成10年日本学術振興会・特別研究員(PD)に就任し、アムステルダム自由大学歯学部にて平成13年まで留学いたしました。平成13年より同大学整形外科・助手、平成16年よりリハビリテーション部・助教授、平成20年よりリハビリテーション科・科長を拝命しております。また、平成18年より日本リハビリテーション医学会・近畿地方会幹事を拝命しております。専門分野は骨粗鬆症性脊椎疾患、鏡視下肩関節手術、上肢マイクロ手術であります。専門医登録を機に更なる研鑽を重ねる所存でございます。

佐々木 裕介 和歌山県立医科大学リハビリテーション科

専門医となりようやくリハ医としての第一歩を踏み出すことができました。リハビリテーション医学は、医学の中でも研究・臨床両面において最も視野を広く持つ必要がある分野であると考えています。臨床ではジェネラリストとして幅広い知識・技術が必要ですので、一段一段経験を積んでいきたいと思っております。日本ではまだまだリハビリテーションの本当の意義が理解されていないのが現実です。各科に渡る横断的な医学である以上、他科からの理解が非常に重要になってきます。他科の医師、患者に関わるすべてのスタッフおよび家族にリハビリテーションの視点を知ってもらい実践してもらうことがより多くの患者のためになると考えています。

細見 雅史 兵庫医科大学 リハビリテーション部

私は、現職に就くまでは、主に神経内科医・老年内科医として医療に従事してきました。それらの臨床の場においてリハビリテーションに対する社会的なニーズの高まりを感じておりました。実際に、勉強し始めて、リハビリテーション医学は、解剖学から生理学などの基礎的な知識を始め、多くの分野にわたり偏りのない知識が必要であることを実感しました。

専門医試験勉強には正直疲れましたが、今回の試験合格後も、まだまだ不足する知識を補うために、あるいは医学の進歩に追いつくためにも日々の勉強が必要とされます。今後ともさらに、学ぶ姿勢を大事にしていきたいと思っております。

三浦 靖史 神戸大学

この度、専門医の認定を頂きました神戸大学の三浦と申します。私は、大学院保健学研究科准教授として、コメディカル教育と、リウマチケアと身体障害者補助犬に関する研究を行う一方で、医学部附属病院リハビリテーション部副部長としてリハビリの運用と、関節リウマチの集学的治療と研究に当たっております。近年、脳卒中ケアユニットの設置や、がんリハビリの実施など、大学病院のリハビリは大きく変わってきました。医学部・附属病院と保健学研究科・保健学科とを一体として、大学におけるリハビリ診療・教育・研究を、時代の要望に応えた充実したものとするべく微力を尽くす所存ですので、ご指導ご鞭撻を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

小谷 育男 北斗会さわ病院

今春、リハビリテーション科専門医の認定を受けました小谷 育男(おせ いくお)と申します。平成15年に鹿児島大学を卒業し、堺市、東大阪市で内科・リハ科の研修の後、平成22年1月から精神科に移り、平成23年7月から豊中市の北斗会さわ病院精神科に勤務し現在に至っております。この間、平成22年4月より、関西医科大学滝井病院リハビリテーション科で研究医員としてリハビリテーション医学の勉強も続けています。現在、精神科医とリハ科医の二足の草鞋を履いておりますが、あまり何科ということにこだわりはなく、高次脳機能障害や認知症、発達障害などを「認知(cognition)」という切り口で、方法論として神経心理学などを用いながら臨床と研究を進めていきたいと思っております。今後ともよろしくお願いたします。

滝沢 歩武 国立循環器病研究センター脳神経内科

はじめまして、国立循環器病研究センター脳神経内科の滝沢歩武と申します。平成17年に鳥取大学を卒業後、長野県の相澤病院にて初期臨床研修を2年間行い、その後同院リハビリテーション科にて4年間後期臨床研修を行い、平成23年度より現在の病院にて脳卒中を中心に勉強させていただいております。今後は脳卒中専門医を取得し、リハビリテーション科専門医として脳卒中急性期から慢性期まで広く診療できるよう、研鑽を積んでいきたいと思っております。また研修会なども積極的に参加し、広い視野をもってリハ医療を学び実践していきたいと考えております。どうぞよろしくお願い致します。

池淵 充彦 大阪社会医療センター附属病院

この度、リハビリテーション専門医の末席に加えていただきました、池淵充彦と申します。卒後は一貫して整形外科医として勤務してきましたが、脳性麻痺患者さんの治療・回復期リハビリテーションに接する機会を得て運動機能の回復と社会復帰に興味を覚え、遅まきながら専門医資格の取得を志した次第です。

現在は西成の大阪社会医療センター附属病院で整形外科医として勤務しており、リハビリテーション医療から離れた環境ではありますが、少しずつでもリハビリテーション専門医としての研鑽に努めていきたいと考えております。

今後とも、諸先生方からのご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

田中 有美 箕面市立病院リハビリテーション科

平成四年鹿児島大学卒、麻酔科より平成九年に鹿児島大学リハビリテーション科へ転科、平成十三年より大阪大学整形外科に加えていただきました。結婚、出産を経て、この度ようやく専門医に認定していただきました。これまで数多くの症例を経験させていただいた、田中信行先生、川平和美先生、大澤傑先生に感謝申し上げます。

リハビリテーション科へ転科の動機は、学生時代の講義で高次脳機能の不思議さもさることながら、趣味であるバドミントンを通じての運動生理、コンディショニング等、病院と生活を繋ぐ、自分にとってはより身近な医療と感じたからです。

これからも地域に根ざしたリハを展開していけるよう、微力ながら尽力したいと存じます。

梅本 安則 和歌山県立医科大学 リハビリテーション科

今回、リハ専門医になり、出発点に立ったという希望を持つ以上に責任を感じています。

リハを専門とする立場となり、責任を持って障害者の全ての問題点をmanagementする難しさを痛感し、諸先輩方の偉大さを再確認しています。

リハ医として、勤務し始めた時から分かっていましたが、専門医となり、前以上に患者さんをmanagementするために必要な知識・経験を粛々と積み重ねていく事だけが、一人前のリハ専門医になる道であると感じております。

今後とも、諸先輩方のご指導を頂き、生命予後・機能・能力・社会生活を向上させる事が出来、患者さんから心から信頼して貰える専門医となれる様に努力してまいりますので、ご指導の程をよろしくお願い申し上げます。

施設紹介 <第10回>

社会福祉法人東大阪市社会福祉事業団 東大阪市療育センター

〒577-0065 東大阪市高井田中1丁目5番16号
TEL:06-6783-1425(代) Fax:06-6783-6105
<http://www.hsj.or.jp/ryoiku/index.htm>



それから二十数年、現行の法制度に則った施設として、診療所にはあらたにST、心理室を配置し、発達障害支援センターPAL(パル)も併設、脳性麻痺、激増する発達障害や重度心身障害児、染色体異常や難病等にも対応しているわけですが、平成20年になり、国で「障害児支援の見直し」がされるに従い、先駆的・実験的であったがために継続できなかった幾つかの取り組みも、約三十年の年月を経てようやく息を吹き返す可能性が出てきたように思われます。

いずれにしても、これからの道程も決して平坦なものではなさそうですが、理念である「障害を持ったすべての子どもたち・人々が、地域の中でごく当たり前暮らししていけるよう、その生活と健康を支える」ために、地道な努力を重ねてゆかなければならないと考えています。

(センター長 勝山 真介)

東大阪市療育センターは、近鉄奈良線河内永和駅から北へ徒歩10分程度の、東に生駒山を望むところにあります。障害児保育の制度化や養護学校(今の支援学校)の義務制化が図られ、ノーマライゼーションやインテグレーションの機運が高まっていた昭和55年1月、その産声をあげました。当初より通園、診療、相談の3つの部門からなり、通園部門の「第一はばたき園」は定員60名の知的障害児、「第二はばたき園」は定員40名の肢体不自由児の施設で、障害種別にこだわらない療育と、親支援の重要性から母子通園を原則としました。指導員、PT、OT、看護師、保健師、臨床心理士など、あらゆるスタッフが一緒に参加し、地域療育を目標に掲げ、子どもの日常生活圏で生活することを手助けするために、さまざまな療育サービスが開始されました。診療部門では、外来児(者)診療(小児、リハ、整形、児

童精神、歯科、他)や、保育所・学校等への巡回相談、一時預かりをする「ホステル」(今の短期入所)を置きました。相談部門にはコーディネーターを置き、家庭児童相談室などの協同療育や、主にボーダーライン層にある子を見るための観察グループ、保健師による在宅障害児(者)訪問指導も行なわれました。いずれもニードに即した、国や府の制度にのらない東大阪市独自の事業でしたが、法制度というものはニードに遅れて整備されていくのが通常で、センター独自の事業や業務も、法制度が整うのを待たず、財政的な制約を受け、またリーダーを失うという悲劇にも見舞われ、あるものは姿を変え、縮小、廃止の道を進むこととなります。(興味のある方は、エンパワメント研究所より出版されております向井承子著「たたかいはいのち果てる日までー医師中新井邦夫の愛の実践」をお読み下さい)

